Interview

JANNICK TOP(STS)

ヤニック・トップ

"De Futura"のような曲を演奏したいとの思いは今でも強くある

長らく伝説上の人物となっていたJannick Top
没年になってようやく彼のバンドSTSの活動が
日本にも伝わり出し、彼の公式なホーム・ページも登場した。
前号でもお伝えした通り、本誌編集部は、電子メール上ではあるが、
彼から直接インタビューの回答を得ることができた。
ここに、彼の口から語られる新事実とともに、
フランスが生んだベースの巨人の実像に迫りたい。

質問作成・伊藤直樹
英訳・宮坂亨一
和訳／構成・宮本英昭

<'70年代―MAGMAとの出会い>

―正式なクラシック音楽の教育を受けたと思っていますが、クラシック音楽からは何を学びましたか？

ヤニック・トップ（以下J）：私はピアノ、チェロ、オーケストラ指揮に関してクラシックの教育を受けているが、現在までの私にとってそれは非常に大きな糧になっている。そこで私は楽譜を通しての自己表現、演奏技術、作曲を学んだ。が、何にも増して大きかったのは、他の人間（ミュージシャンも聴衆も等しく）とあたかも精神と魔法のような関係を分かち合えるようになったことだ。その創造性は想像を絶するものだ。ここから私は、精神的な至福感および音楽的直感力を研ぎ澄ますために、しっかりとした作品を著き、倫理的に正しく脱退させていくことの重要性を学んだ。

―プロ・ミュージシャンとしてのキャリアはいつ頃からですか？　TROCでの録音が初レコーディングでしょうか？

J：私は非伝マルセイユ出身で、Vincent Senoというドラマーとバンドを組んだこともあるが、向こうでは食っていくのが大変で、結局、パリに出てきてAndre CeccarelliとTROCを結成した。あの作品が私の初レコーディングだ。

―MAGMAに加入したきっかけを教えて下さい。

J：TROCと共にサン・ジェルマンの「La Bulle」というクラブで演奏していると、Christian が見に来た。2回目に彼と会ったときにMAGMAに加入することを決心した。

―あなたから見たChristian Vanderはどうですか？コバイア・ストーリーについてはどう思いますか？

J：Christianは本物のアーティストであり、本物の音楽を生み出すことの出来る人物だ。こういう人物はまったく希有だ。コバイアは彼のアイデンティティーの一部であり、コバイア語を使うことでは自分の想像力を自に任して表現することが出来るんだ。フランス語を使うよりも的確に。

―'74年10月、コルマールでのステージを最後にMAGMAから一度脱退していますが、この理由は？

J：私は当時MAGMAを取り巻く諸々に関して、とても居心地の悪い思いをしていた。私も若くて、ちゃんとした見通しを立てることができなかった。それはとMAGMAにおける共同体験が強烈だったとも言えるのだが。

◆ほとんど無一文でMAGMAを離れたTopは「食っていくために公民では働きました」と語っている。1975年、彼は様々なセッション・ワークに関して、UTOPIC SPORADIC ORCHESTRAと、唯一存在する彼名義のレコード、シングル「Utopia／Viva」という重要な仕事をはじめている（どちらもGeorgio Gomelskiがらみである点が興味深い）。

◆UTOPIC SPORADIC ORCHESTRAは、1975年10月17日 Nancy Jazz Pulsationのために1度きり結成されたビッグ・バンドで、フランスのミュージシャン17人により、Topの率になる"De Futura Hiroshima"を演奏した。このプロジェクトは結局この1回限りで

消えてしまうが、Top本人は今回の質問に「私は今でも、ああいう音楽をやりたいという強い欲求がある」と答えている。また、曲名についてもかねてからの疑問をぶつけてみた。

―"De Futura Hiroshima"は日本の広島を曲名に盛り込んでいますが、この理由は？　核兵器に対するあなたなりの意見だったのでしょうか？

J：人間の反行は広島において一つの極に達した。あの曲は核兵器の問題（更にはもっと一般的な事柄も含めて）に対する人類の良識に訴える目的で書いている。名前を忘れてしまったが、あるフランスの哲学者はこう言っている。「良心無き科学は魂の破滅でしかない」

◆また一方のシングル盤については
J：あれはGeorgio Gomelskiが頂し進めたプロジェクトと、彼との共同作業はあまで最後となった。

◆'76年になると、再びMAGMAからお呼びがかかり、復帰を果たすが、いくつかの楽曲（ライヴのみの演奏を含む）を残し始めっ月でMAGMAを去ってしまう。

―'78年に再度MAGMAに参加し、1枚のアルバム「Ôdû Wôdû」録音と1回のツアー（Renaissance Tour）を行っていますが、参加したきっかけは？　また脱退した理由は？

J：始めは「全てを白紙に戻してゼロからやり直そう」という心構えで参加したのだが、外部からの影響を全部シャット・アウトして、この姿勢を貫くのは難しいことがすぐにわかった。だから脱退した。

◆MAGMA脱退後は、その周辺人脈の作品に名を連ねる一方、Michel Joansz、Francoise Hardyのようなポップスの分野での仕事が増えてくる。

<'80年代、'90年代前半―様々なセッション・ワーク>

◆1980年にはDidier Lockwoodのマネージャーの役割によるLockwood／Top／Vander／Widemannという弱ジャンによるスーパーグループFUSIONが結成され、'81年にはアルバムも録音している。

―FUSIONで再びChristian Vanderと一緒に演奏したときの感想は？　ライヴ演奏は多かったのでしょうか？

J：Vander、Widemann、Lockwood―それぞれがユニークであり、また組合いとにこだわる連中でもある。特にWidemannがリーダーとしてグループを引っぱっていた。彼と演奏できたことは大変嬉しいと思っている。ジャーナリスト諸からは「本間最悪アルバム」という、いかがわしい栄誉までいただいた。言い換えれば、ブッポンの大成功だったわけだ。FUSIONはジャズ・クラブでの演奏が多かった。

◆'80年代以降はMichel Berger、France Gall、Serge Perathonerらとは全面的な共同作業を手掛け、Topにとって大変重要な意味合いを持つのだが、ここら辺は本稿の目的からはずれてしまうし、正直筆者も完全に掴み切れていないので、また別の機会に譲りたい（興味のある方は文末に記した彼のオフィシャル・サイトを参考にされることも勧めます）。

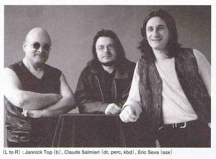
<'90年代後半―STS始動>

◆'90年代後半に入って、いよいよSTSが始動する。また'95年にはFUSIONが再編成されライヴを行っている。

―'98年にFUSIONが一時的に再結成し、ライヴを行いましたがこれはどうでしたか？　この時の演奏がきっかけとなって自分のバンドSTSを結成しようと思ったのでしょうか？

J：FUSIONの再編は、Didier LockwoodとJMS（Jean-Marie Salmanie―LockwoodのマネージャーでありFUSIONのプロデューサー）の共同作業20周年を記念して行われた。その時STSは既に活動を開始していた。

◆さて、現在の彼を語る上で最も重要なのがこのSTSである。なかなか情報が伝わってこなかったが、'97年のライヴを元に自主制作されたライヴCDが、ようやく国内でも発売になった。STSとはその名の通り、Claude Salmieri（ds）／Jannick Top（b）／Eric Seva（sax）の3人からなるバンドで、これに時として、ギタリストのThibaut Abriolまたは Mathias Deemierが加わるという構成をとっている。このCDを聴く限り、ジャズ・ロック的な型組は使っているものの、実に多彩な要素が詰め込まれている。Topのプレイは、MAGMA時代の激烈さこそ表面には出ないものの、内包するエネルギーの凄まじさは随所に感じられ、フランスのベーシストの間でも神様のように語られるその実力を感取できる。



（L to R）：Jannick Top（b）、Claude Salmieri（ds, perc, kbd）、Eric Seva（sax）

―STSのコンセプトとはどのようなものでしょうか？

今後の方向性はどのように考えていますか？

J：STSの音楽というのは、その原則に基づく制御的な技術の多くをジャズから拝借しているが、ジャズよりも厳格ではっきりとした構造性を有しており、またサウンド・エフェクトを大胆に取り入れている。今後のSTSの目標は新たにエスニックな要素を取り入れることで、為に近べた方向性をさらに押し進めることにある。

―現在STSは外に並行して行っている活動はありますか？

J：STSは外にはまったくどのグループとも、どんな活動もやっていない。ソロ・アルバムを制作するつもりがあって、これが唯一の例外になりそうだが、どこのレーベルから発売するか、その辺が未だに問題となっていて、制作に入るのはもうちょっと先の話になりそうだ。

―スタジオ録音作品の予定は？　また日本での演奏の可能性は？

J：STSのセカンド・アルバムの録音を計画している。日本に行って演奏してみたいという意思はは一ぱいとある。ただ、それがいつになるかは「主のみぞ知る」ということだ。

<機材、チューニングについて>

◆長年に渡り使用しているエフェクト、またチェロ奏者であった経験を生かした独自のチューニングについて、訊いてみた。

―非常はチェロっぽいと思いますが、これがあるためエレクトリック・ベースもチェロのチューニングを施している理由でしょうか？　ベースもチェロのチューニングで演奏するメリットは？

J：私の楽器はエアハ？最初で、その次がチェロだった。ベースに触ったのはその次の次に後になる。私のチューニングの変遷はこのようになっている。（4弦から）EADG。ついで DADG。その後すぐに DGDA。最終的にCGDA。

この様にチューニングを変えていった最大の理由は、低音が充分に出ていないと感じたからだ。最終的なチューニングには、確かにチェロ奉者としての経験が生かされている。このチューニングの利点は、10度の音程を簡単に押さえられ、より幅広いレンジが"手に入る"ということだ（たったその弦で、5弦楽器よりも平均広い音域がカヴァーできる）。ただし、このチューニングでは短い音程のとりかたが困難で、単純に音階を弾くなんてことが、時間のような音価を伴うことはある。

―現在の機材を教えて下さい（ベース、アンプ、エフェクター）。

J：ベース：SADOWSKY（fretless）、Tom ANDERSON（fretless）、Godin FENDER（jazz bass）

エレクトロ・ダイナミック・ベース：Goug（bass cello）
アンプ：SWR
サウンド・エフェクト：Boss pedals、Jamman、Digiteck（multiple effects）

<最後に>

◆先日、Klaus Blasquizのニュー・プロジェクト、MAISON KLAUSのベーシストLaurent Cokelaereと話をする機会があった。彼にとれば、まだ具体的な調整作業はしていないが、と言う注釈付きではあったが、現在本国でMAISON KLAUS、STS同時来日の可能性を模索中とのことであった。Jannick Topのプレイを生で見られる日も近いかも知れない。またSTSのセカンド・アルバム、ソロ・アルバムにも期待が膨らむ。現在進行形のミュージシャンとして、この天才ベーシストの動きを見守りたい。

Jannick Top official site :
http://www.1212.com/a/top/index.html